

令和4年度第2回堺市北区政策会議 会議録

日 時：令和4年11月11日（金）10時から11時53分まで

場 所：堺市北区役所3階302会議室

出席者：【構 成 員】（敬称略）天野隆次、魚谷守信、加我宏之、金戸郁子、清水苗穂子、竹内裕賀、長尾永子、羽根恵子、坊農豊彦、八木則之、吉村登志子
（以上11人出席）

【特別構成員】（敬称略）北口裕子、辻富士子（以上2人出席）

【事 務 局】垂井究（区長）、松尾恵子（副区長）、金本龍二（北保健福祉総合センター所長）、緒方剛（自治推進課長）、宮田大志（学校連携支援担当課長）、村田博史（子育て支援課長）、山本美佐子（北保健センター所長）、羽野敏博（地域福祉課長）、樋口年秋（堺市社会福祉協議会北区事務所長）、林大輔（企画総務課長）、氏川善裕（企画総務課課長補佐）、増川哲（企画総務課企画係長）、竹内香奈子（子育て支援課主査）、阪本勇一（企画総務課）

会 議：公開会議

傍 聴：傍聴者数0人

1 開会

2 区長あいさつ

○垂井区長 皆さんおはようございます。北区長の垂井でございます。構成員の皆様におかれましては、お忙しい中お集まりいただき、誠にありがとうございます。この北区政策会議ですが、昨年8月に立ち上げ、これまで3回開催いたしました。いずれも新型コロナウイルスの影響により書面開催となり、皆様には大変ご迷惑をおかけしました。今回初めて一堂に会して開催されることを私も大変うれしく思っております。ご承知のとおり、北区政策会議は北区の実情や特性に応じて、構成員の皆様からご意見をしっかりと聞かせていただきながら区の政策形成を進めていくことで、特色ある区政を実現するためのものです。

昨年度は、北区の魅力発掘・発信・創出について、様々な視点で皆様からご意見をいただきました。大変有意義なご意見、ご提案をいただいたところです。いただいたご意見全てに応えることは難しいところでしたが、いくつかの提案を施策に反映して、取り組んでいます。本当にありがとうございます。

今年度は、北区みんなのまちビジョンの3つの基本方針の中の1つ「みんなで関わる子育ての街」をテーマとして、前回会議より子育てをテーマにご議論をいただいています。前回の第1回会議は書面にて、構成員の皆様から様々なご提案をいただいたところです。

本日は、それらのご提案やご意見を踏まえて、事務局でこのようなことができるのではないかと、3つの想定事業案を提示させていただいています。これらに対して、様々な角度から、忌憚のないご意見、また、様々な議論をいただき、北区としてしっかりと子育てのまちを実現していきたいと考えておりますのでよろしくお願いいたします。

簡単でございますが、開催に当たりましてのご挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いいたします。

3 構成員紹介

○事務局（阪本） 続きまして、今回の会議は初めての対面での会議となりますので、改めて構成員の皆様のご紹介をさせていただきます。加我座長から座席の時計回り順に構成員の皆様をお一人ずつ紹介させていただきますので、一言ずつご挨拶をお願いいたします。それでは、大阪公立大学農学部緑地環境科学科教授、加我座長です。

○加我座長 加我です。お集まりいただきましてありがとうございます。よろしくお願いいたします。

○事務局（阪本） 北区自治連合協議会会長、天野構成員です。

○天野構成員 北区の連合会長の天野です。今日は忌憚のない意見を皆さんから発信いただきまして、この会議が前向きに進むように、お互いに頑張っていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

○事務局（阪本） NPO法人堺なんや衆監事、魚谷構成員です。

○魚谷構成員 対面での会議、心待ちにしておりました。よろしくお願いいたします。

○事務局（阪本） 公募構成員の金戸構成員です。

○金戸構成員 金戸と申します。現在、子育て中で、小学校1年生の子どもがいます。本日はよろしくお願いいたします。

○事務局（阪本） 阪南大学国際観光学部国際観光学科教授、清水構成員です。

○清水構成員 阪南大学の清水と申します。やっと皆様にお会いできてよかったです。どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局（阪本） 大阪公立大学ボランティア・市民活動センター学生スタッフ、竹内構成員です。

○竹内構成員 大学3年生の竹内と申します。本日はよろしくお願いいたします。

○事務局（阪本） 家事代行・ベビーシッターサービススマートスマイル代表、子ども食堂つなぐば代表、長尾構成員です。

○長尾構成員 長尾と申します。中百舌鳥で家事代行とベビーシッターサービスを子育て経験のある主婦30人で運営しており、子ども食堂は始めて5年になります。地域の居場所づくりになればとの思いで取り組んでいます。よろしくお願いいたします。

○事務局（阪本） 北花田庭園都市・グランアヴェニュー防災会副会長、羽根構成員です。

- 羽根構成員 羽根です。北花田から参りました。よろしくお願ひいたします。
- 事務局（阪本） 一般財団法人関西情報センター、社会ビジネス創出グループ課長・主任研究員、坊農構成員です。
- 坊農構成員 坊農と申します。よろしくお願ひいたします。
- 事務局（阪本） 公募構成員の八木構成員です。
- 八木構成員 公募委員の八木です。現在、人権擁護委員や民生委員をしております。また、防災士でもあります。まだまだ手探り状態ですので、いろいろ教えていただきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。
- 事務局（阪本） 社会福祉法人金岡会、幼保連携型認定こども園、わんぱく保育園園長、吉村構成員です。
- 吉村構成員 わんぱく保育園の吉村と申します。昨年からはまったこの会議ですが、初めての対面での会議ということで楽しみにしてまいりました。よろしくお願ひいたします。
- 事務局（阪本） 次に、特別構成員のご紹介です。堺市子育てアドバイザー、北口特別構成員です。
- 北口特別構成員 北口と申します。西百舌鳥、百舌鳥校区で子育てアドバイザーをしております。どうぞよろしくお願ひします。
- 事務局（阪本） 堺女子短期大学及び大阪健康福祉短期大学非常勤講師、辻特別構成員です。
- 辻特別構成員 辻と申します。私は堺市で長い間、保育の現場や行政で保育園や子育て関係の仕事をしてきましたが、現在は保育業界をめざす学生さんたちと一緒に、様々なことを学び、勉強している立場にあります。
住まいは南区ですが、北区は保育や教育施設、子育てに関して、常に堺市をリードする活動を続けてきておられますので、私も勉強させていただきたいと思ひています。よろしくお願ひいたします。

4 事務局紹介

《事務局から事務局のメンバーについて紹介》

5 会議報告

《事務局から配布資料の確認、会議の公開についての説明、傍聴人数の報告》

6 議事

- 加我座長 大阪公立大学の加我です。本日が対面で集まる初めての会議となります。昨年の書面会議の決裁で皆様からご推薦をいただき、座長をさせていただいております。
少し自己紹介をさせていただきますと、現在、農学部の緑地環境科学科に所属しております。元々は生命環境科学域と呼ばれていた所属です。私は大阪府立大学の農学部卒業です。農学は、人と自然の関係の中で作物を育て、環境を読み解くことが基本になりますが、その中でも、緑地環境科学科の中で、私は緑地計画学を専門にしています。緑地計画学の元は造

園学になります。食料生産のために人間が環境を読み解きながら作物を育てる、それを庭園や公園、さらには造園学を発展させて、都市の中で緑空間がどうあればいいのかということに専門にする緑地計画学を、学生とともに学んでいる者でございます。

どちらかといいますと、私はハードをどのように造っていけばよいかということに専門にしております。公園や庭園、庭が皆さんにどのように使われていただくのか、また、使われるのか、それをうまく使いこなすことによって、子どもたちやご高齢の方々、若い世代の方々が健やかに過ごしていくといったことを専門としていますので、今日のテーマの子育てに関して、自分の専門から意見を言えるのだろうかと不安に思っていますので、構成員の皆様にもご協力をいただきたいと思います。限られた時間ではございますけれども、多くのご意見をいただきながら進めていきたいと思っておりますので、ご協力よろしく申し上げます。

それでは会議を進めます。本日の案件は次第のとおり2つあります。まず、案件1についてです。本日の議題に入る前に、書面開催となりました第1回会議の意見の振り返りを事務局からご説明いただきたいと思います。それでは、事務局で説明をお願いします。

○事務局（阪本） それでは、第1回会議での意見の振り返りについてご説明させていただきます。資料1をご覧ください。第1回会議では、子どもの生きる力を育む支援、孤立を防ぐ子育て世帯間や地域とのつながりという2つの意見聴取テーマに沿って、構成員の皆様よりご意見をいただきました。資料1は、第1回会議で皆様からいただいたご意見を抜粋し、まとめたものです。

《以下、資料1に沿って主なご意見の要約を紹介》

○事務局（阪本） 説明は以上です。この場での紹介は以上とさせていただきますが、このほかにも、たくさんの貴重なご意見をいただいております。改めて構成員の皆様にはお礼を申し上げます。資料1の説明は以上です。

○加我座長 ありがとうございます。事務局から書面開催となった第1回会議で構成員の皆様からいただきました意見の振り返りということで説明いただきました。

ここで意見交換をしてもよいのですが、前回会議での皆様の意見を受けて、事務局で想定事業案を検討しているようですので、それについて説明いただいて、その後、資料1の振り返りも含めて、言い足りないことも多々あるかと思っておりますので、ご意見をいただいて充実させていきたいというふうに思います。

それでは、案件2に進みます。事務局で検討した想定事業案について事務局から説明をいただき、それらをブラッシュアップさせるため、構成員の皆様と意見交換をしていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

○事務局（阪本） それでは、想定事業案の説明の前に、資料2 想定事業案へのご意見の視点、についてご説明いたします。この後、説明いたします3つの想定事業案に対してご意見をいただく際の参考にさせていただきたく存じます。

まず、妥当性・有効性の視点では、想定事業案は意見聴取テーマがめざす姿につながる内容となっているか、子どもや保護者のニーズを満たす内容となっているかなどについてご意見いただきますようお願いいたします。次に、地域との協働の視点では、地域との協働は十分できているか、ほかに協働すべき主体はあるかなどについてご意見くださいますようお願いいたします。最後に、効率性・有効性の視点では、より効果的な事業展開方法や実施方法、協働の方法などはあるか、他の施策・事業等へのいい波及効果が得られる内容となっているかなどについてご意見くださいますようお願いいたします。

以上、ご意見の視点についてご説明いたしました、あくまで参考にお示したのになります。これ以外の自由な視点でも構成員の皆様のお立場やご経験からご意見いただきたく存じますので、よろしくお願いいたします。

○加我座長 ありがとうございます。事務局から資料2について説明がありました。事業案をよりよいものとするため、構成員の皆さんから活発にご意見をいただきたいと思います。

それではまず1つめの意見聴取テーマ「子どもの生きる力を育む支援」に関する想定事業案の説明です。資料3、資料4について事務局から説明をお願いします。

○事務局（竹内） 子育て支援課の竹内と申します。よろしくお願いいたします。

それでは、事業の説明に入りたいと思います。まず、資料3をご覧ください。第1回会議でいただいた皆様からのご意見を参考に、子どもの生きる力を育む支援として想定事業を2つ考えさせていただきました。

まず、1つ目の事業名称ですが、生きる力を育むプログラム事業としました。これまで子育て支援課では、生きる力の基礎養成を重要視してきましたが、それに特化した事業や取組が十分ではありませんでした。今回、子どもの主体性や思考力、判断力についても多くのご意見をいただいたこと、また、子育て支援課として不十分であった部分を改善すべく、当事業を検討いたしました。次に、事業の中身の説明に入りたいと思います。対象者は学齢期の子どもとしております。実施期間は夏休み期間中、頻度は週1回、全3回実施いたします。場所は地域の子ども食堂で、子ども食堂のスタッフさんや大学生ボランティアにご協力いただくことを予定しております。自らの意思と責任で、主体的に思考、判断、決定、解決できるよう、学習、食、生活習慣に関する支援を行い、体験活動を通じて子どもの生きる力を育むことを目標としております。体験活動として現在考えておりますのは、例えば大泉緑地での冒険や宝探し、スポーツ、おやつ作りなどを考えております。次に、成果指標は、プログラム参加者数を指標に効果検証したいと考えております。次に、スケジュールは、令和5年度からの実施に向け、現在調整中です。次の特記事項について、まずは小学校1年生を対象としますが、将来的に対象学年を拡大していく予定です。以上で資料3の説明を終わります。

続いて、2つ目の事業に移ります。資料4をご覧ください。こちらの事業名称は、アンガーマネジメント事業としました。生きる力の基礎には、感情のコントロールや自分の気持ち

をうまく表現することも含まれますが、今回、コミュニケーション能力や協調性、表現力についても多くのご意見をいただきましたので、当事業を検討いたしました。次に、事業の中身ですが、大きく分けて、2つの内容を実施したいと考えております。1つ目は、ファシリテーターに講師を依頼し、区主催でアンガーマネジメント講座の実施を考えています。対象は小学校低学年の児童としております。区役所での講座や小学校との連携した講座も模索していくことを予定しています。通常、アンガーマネジメントは大人向けに行われることが多いのですが、今回は子ども向けに実施を考えております。例えば、前向きになれる、気持ちが落ち着く言葉をつぶやいたり、目を閉じて6まで数えたりするなど、怒りのコントロール法を身につけることで、怒りを感じたとしても、その先どうするかを自分で決断して対処することができるようになります。また、そうすることで良好な人間関係の構築にも役立ちます。2つ目は、アンガーマネジメントに関する資格取得を支援することです。取得対象者は支援者である区の子育て支援課の職員、また、地域で子育て支援に携わっている方々を考えております。取得する資格の一例として、アンガーマネジメントファシリテーター養成講座（日本アンガーマネジメント協会）がございます。次に、成果指標ですが、アンガーマネジメント講座参加者数とアンガーマネジメントに関する資格取得者数を指標に効果検証したいと考えております。次に、スケジュールですが、調整の上、実施時期については今後検討していく予定としております。次に、特記事項ですが、子育て支援課職員等、支援者が資格を取得し、講師となることで講座の費用を抑えることができると考えております。また、資格取得した職員は、そのスキルを日常のケースワークで活用できるというスキルアップの側面もでございます。以上で資料4の説明を終わります。

○加我座長 ありがとうございます。それでは、少し説明が長くなりましたが、構成員の皆様から意見をいただきたいというふうに思います。よろしく願いいたします。

まずご質問からでも構いませんし、前回会議の意見がどのように反映されているのか、また、こんなことも加味したらいいのではないかとといったこともご意見いただければと思いますので、時間の許す限り意見交換をしたいと思います。よろしく願いいたします。

○天野構成員 この資料には、いいことばかり書いているのです、悪いことは1つも書いておりません。その悪いところを直していくのが、この会議だと私は思うのです。そういったことが全然列挙されないで、いいことばかり言っただけで、何もできません。

具体的に申し上げますと、ここに書いてあるのは、先ほど申し上げたように、色んな意味でいいこと、いわゆる希望的な観測です。そうではなく、水面下にあるものは何なのかということを考えますと、私は毎日実務をしています。皆様が実務をされているかどうかは分かりませんが、私は朝から晩まで、地域で子どもとの関わりをしています。そういった意味で考えますと、一番大きな原点は何かといいますと、今、小学校に進級しますと、当然学校へ行きます。その登下校を見守るため18年前、子ども見守り隊というものを作ったのです。

この見守り隊が非常に先細りになっているのです。担い手になる人がいなくなっている。担い手はお年寄りばかり、若い人はなかなか来てくれません。言い換えますと、子どもをお持ちのPTAの親御さんがもっと勇気を持って出てきてもらわないと、今の状態では先がないことが見えています。例えば、私どもの中で一番の高齢者は89歳ですが毎日見守りのため立っています。そのような方が一生懸命地域のために頑張ってくれているが、そういった姿を見てPTAの若い人たちは何を感じているのか。何回も私は手伝ってくれるよう申し上げましたが返ってくる答えは「働いており、忙しい」といった言葉ばかりです。忙しければ何もなくていいのでしょうか。少なくとも私どもの小学校は、堺市で一番児童の数が多く1,148人います。言い換えますと、親御さんもそれだけの数がいるわけです。年に数回は見守ってほしいです。そういったことを何とかしていかないと、この水面下にあるものから、いわゆる家は土台からきちんとしていかないと、その家はもちません。そのように思います。ぜひとも、このことについては、今日は時間もございませんので、これ以上申し上げませんが、また、皆様とゆっくり討議をする時間もいただけたらと思っています。以上です。

○加我座長 ありがとうございます。この件についてでも構いません、地域で感じておられることがあれば、そのようなことも含めてご意見いただきたいと思います。いかがでしょうか。

○魚谷構成員 天野様がおっしゃるとおりのことで、自分たちの世代はあまり子育てに関わらなかった経験が大いにあります。専ら妻任せ、仕事オンリーというわけではないですが、うちはほとんど家庭を顧みなかったこともあり、私自身、今、反省の上で思っていますことは、やはり男親も何らかの形で子育てに関わって、地域の活動に少しでも参加いただければ、状況が大分変わってくるのではないかと思います。

これも天野様のおっしゃるとおり、今、ほとんどの地域団体、あるいは市民活動団体、ボランティア団体は高齢化で、なかなか後継者がいないことに困っているところが多々あります。それはそれとしまして、やはり子育てに関しては、父親がもう少し関わっていくことが、解決の1つになるのではないかと思います。

○加我座長 ありがとうございます。他はございませんでしょうか。はい、どうぞ。

○八木構成員 少し視点が変わるかもしれませんが、私、資料1で、子ども同士の喧嘩に親がすぐに仲裁に入らず、子どもで解決するというを書かせてもらったのですが、これはどうということかといいますと、親や大人が解決してしまいますと、通常は子どもの中で不完全燃焼のままになってしまうということで、なかなか解決能力が身につかないということです。こういったことが今までの子育てでは多かったと思うのですが、例えばその子が大人になり、トラブルが起こった時に、結局、地元の有力者や職場の有力者、あるいは身内のボスの人、そういった人に解決を委ねることになりまして、こういったことは最終的な解決にならず、もしそういう人がいなくなるともう解決できないということにもなります。

私も様々な地元の役をやってきた中で、やはり近隣トラブルや家庭内トラブルもそうです

し、職場でのトラブルなど、大人になってもトラブルというものは常に付き物なのですが、そこで、それぞれが考えていく能力というものを子どもの時から養っていくということで、結局大人になった時に、そういった解決を通じて地域が活性化して、コミュニケーションも育んでいけるのではないかと、このように思っております。

○加我座長 ありがとうございます。どうぞ。

○羽根構成員 案1について質問ですが、このプログラムは北区全体で1か所のみの実施でしょうか。

○事務局（竹内） ご質問ありがとうございます。現在、考えておりますのは、3か所の子ども食堂さんにお声かけをさせていただいております、その3か所で実施する予定です。

○羽根構成員 ありがとうございます。天野様がおっしゃられたことにも関連しますが、やはり、できれば何ヶ所かで実施するのではなく、各小学校区で実施することができれば、広がりをみせると思います。なかなかこのようなイベントを募集しても、真に支援が必要でない子が応募して参加するということが多いように思います。ですから、各校区の地元の小学校などの体育館なり、そういった場所で実施して、広げていかないと、あまり意味がないのかなという気はいたします。そのためには、人材が必要なのが課題だとは思いますが。

○加我座長 ありがとうございます。続いてどうぞ。

○坊農構成員 資料3のプログラムですが、区の予算の都合もあるとは思いますが、夏休みの期間、週に3回というのは少な過ぎるのかなと思いました。というのは、やはり子どもたちに、基本的な生活習慣や食育を教育するなら、3回ではあまりにも短過ぎるのではないかと思います。子どもはやはり親など、子育てする人の背中を見て育つというので、回数が少し少ないのかなというのが、今思ったところです。例えば、合宿みたいなものや、トレーニングキャンプみたいなものを開催し、せめて1週間ぐらいはずっと食育や学習支援を通じて、ずっと指導していただく方の動きを見て学ぶというのが必要かなと思いました。

○加我座長 次々年度も含めて、そのあたりを子育て支援課でどうお考えですか。

○事務局（竹内） 現段階では、令和5年度は全3回と考えているのですが、5年度に実施してから次の年度に向けて、その辺りを少し盛り込めるように検討してまいります。

○加我座長 ありがとうございます。どうぞ。

○吉村構成員 子どもが本当に身につける「べき」という表現には少し引っかかりがあったのですが、“身につけてほしい”と思っていることについては、皆様が書かれているご意見そのものだなと思っています。

先ほど天野さんがおっしゃったように、子どもは昔から環境さえ整えば、そんなに育ち自体は変わらないのではないかと考えています。また、先ほど親の様子についてのお話もありましたが、保護者の状況もおそらく昔と比べれば変わってきているのだろうと思います。だからこそ、こうやって様々な専門家の方々が集まって協働することが大切だと思います。

もちろん、保護者への動機づけも必要ですが、家庭や地域でできること、私たちができることは何かということを考えなければいけない。保護者が忙しすぎて子どもに関わることが難しい社会状況があったりするので、私たちが何か手助けしないといけないという現状があると感じます。

ですので、色々と皆さんのご意見を取り入れてもらって、こうやって子育て支援課さんが2つの想定事業案を提案されて、まずはやってみることかなと思います。

ここに子ども食堂とありますが、最近子ども食堂が増えてきています。堺市全体で約80か所以上あるとお聞きしました。地域に根差した子ども食堂さんがどんどん増えるということは、そういった支援の場所を求めている人が多いということだと思います。

子ども食堂のスタッフや学生ボランティアと一緒に書かれていていいことだと思ったのですが、3か所と聞いて残念に思いました。北区内に子ども食堂は14か所あります。全てで実施というわけには現実にはいかないと思いますが、もし子ども食堂で実施するのであれば、もう少し多くの子ども食堂さんにご協力いただけるようにできればと思います。また、できれば、先ほどおっしゃっていたように、子どもに必要な空間も確保できる自然の中など1か所でできないものかとも思いました。それぞれの子ども食堂は子どものための空間を色々作っておられて、規模にも限界があると思うので、大きな規模で実施できればと思います。先ほどおっしゃっていた学校単位の実施でも少しは規模が広がると思うし、子どもに必要な、昔から言われる三間（時間・空間・仲間）の大切さを大人も一緒に体験できたらいいなと思います。そのような体験の必要性や経験を大人自身が感じることで子どもは育つのではないかと思います。

ですので、資料3の事業などは、最初は小学校1年生をターゲットにして、大泉緑地でやるといったところで、そこに学生ボランティアさんもいて、子ども食堂のスタッフさんもいて、顔つなぎができる人たちがいることで安心して参加できるのではないかと思います。私たち民間園も北区には21か所ありまして、毎日子どもたちや保護者の方々と関わったりしています。ひとつの社会資源として、ぜひ活用していただきたいなと思います。今、小学校の校長先生方と園と小学校の接続の仕方について話し合う機会を作っています。どう具体的に接続していくのかということでもやはり私たち関わる大人、教育者側がどう視点をそろえるかということが大切だと感じています。行政中心に実施していただく企画であるならば、教育委員会も一緒に参加してもらいたいなと思います。

あと、アンガーマネジメントは、実施するのであれば親子で一緒に学ぶ形にしてほしいです。子どもだけじゃなくて親子で学ぶとしてほしい。アンガーマネジメントの手法は、とても素敵なんですけれど、周りの大人や環境から学ぶことが子どもはほとんどなので、周りの大人がどう言動を整えていくことがとても大事なかなと思います。子ども向けには小学校の1つの講座としてやってもらえたらいいかなと思うのと、できれば区役所でするのでしたら、

子どもと一緒に親も学ぶ講座としてほしいなと思います。以上です。

○加我座長 ありがとうございます。

○北口特別構成員 私は今、地域の子ども会で役をやっていて、うちの地域は集団登校がある珍しい小学校なのですけれど、集団登校で、毎日のように親御さんや子どもたちの様子を見ていて思うことは、親御さんが、1年生はどのぐらいのことができるのだろう、幼稚園、保育所から小学校1年生になった途端、1人で行動することが増えたときに、どのぐらいのことができるのだろうといったことや、例えばちょっと乱暴な子であったり、飛び出していたりする子もいるのですが、それはやんちゃな部類なのかとか、あるいは、子どもと一緒に親が、ここは危ないよねとって、経験させて導いていかなければならないのかということが、親自身が1年生の成長段階ってどのぐらいで、どのぐらいのことができるのか、どのように導いていけばいいのかなってということが、もしかしたら分かっていらっしゃらない方がいるように感じますので、やはり皆さんおっしゃっていたように、せっかく子どもの生きる力を育むのだったら、親とか周りの保護者あるいは地域の方が、子どもはこのぐらいのことが今できるものだ、あるいは次、この段階に到達して、つながっていきなきゃいけないから、こういう投げかけ、働きかけが必要なのだということを、特に1人目の親御さんは知ってほしいなというふうに思います。そうすることで、何か一応無事に学校から帰ってきているけど、突然先生から電話かかってきて「えっ、そんなことしていたの」といったことも少なくなるのではないかなと思うので、本当におっしゃられていたように、子どもがプログラム活動をしている裏でもいいですし、親御さんに対してそういったお話をしたり、一緒に子どもどう活動していけるのかとか、そういうことをお伝えしたりするようなことも必要なかなと思っています。

これは少し繰り返しになり申し訳ないのですが、こういったプログラムに応募される方は、子どものことを意識していると言えば変ですが、意識してない方はいないと思うのですが、何とかなっていると思っていらっしゃる方はそういうイベントや事業に対してアンテナを張っていないことが多く、そういった家庭の子どもにこそ必要な支援とすごく思いましたので、募集の仕方は工夫できないのかなと感じております。

ですから、単なるイベントで終わるのではなくて、地域や、小学校の先生あるいは保育所、幼稚園の先生とも連携して、小学校1年生って本当に何か今までと世界が大きく変わる感じがするので、そこの連携があった上でのこのイベントでないと、イベントしました、そして終わりましたということにはならないようにしたいと感じました。

○加我座長 ありがとうございます。続いて、ご意見等ございませんか。

○長尾構成員 堺市の中百舌鳥で子ども食堂を運営していますが、5年前にスタートしたとき、堺市社会福祉協議会の方と一緒に校区の校長先生にご挨拶に行きました。今は子ども食堂が北区でもすごく増えているので、ご理解のある学校も多いのですが、当時は、学校とは別だ

から勝手にしてくださいといった状況で、例えば、チラシを皆に知ってもらいたいから配ってほしいとお願いしても「学校の外だったらいいです」と言われたこともありました。そうかと思いきや、その隣の小学校はすごくご理解があつて、全校児童にチラシをコピーして配ってくれたり、そういったところに少し思いがあつたりするので、例えば教育委員会と連携していただくことなどはやはり難しいのでしょうか。

○事務局（竹内） ご質問ありがとうございます。今現在、教育委員会との連携は考えておりませんでした。ただ、募集の方法は、チラシを全小学校の児童に配布させてもらおうと考えておりますので、学校の先生には「この子は」と思う子どもさんがいらっしゃったらお声かけをしていただくことで、学校とは少し連携はできるのかなと考えております。

○加我座長 はい。では、次は羽根様お願いします。

○羽根構成員 やはり皆さんがおっしゃっていたように、アンテナを張っていない親御さんも対象にするためにはターゲットが小学校1年生ってということなので、学校教育の中でこういったことを取り入れて、保護者も参加というような、そこに合宿を取り入れたりなどしながら、保護者の研修もあつてということにしないと、なかなかイベントだと来ない人がほとんどだと思うのです。ですから、教育委員会、学校の先生の負担もかかると思うのですが、学校を中心に地域、家庭を取り込むという方法が一番いいと思います。

○加我座長 続いて、吉村さん。

○吉村構成員 確かに学校が中心となって実施するとなると、学校に負担がかかるような感じになるのですが私たちも接続が大事と思っています。そのようなことは例えば指導要領には十数年前からずっと書かれていることですが、なかなか幼児教育の場から小学校へのつながりがうまくいかない現状があります。それはなぜかという、ひとつには学びの仕方が違います。私たち幼児教育は学びの芽生えと言われ、経験や体験中心です。小学校の自覚的な学びとは確かに学びの仕方は違うのですが、違うからといって、そのつながりが切れることは避けられないといけないと思います。

校長会への働きかけは5年前から行ってきました。今では、連携・接続について北区校長会の先生方はすごく前向きに考えていただいています。今年も園と小学校との接続を考えるということで、現場を見学して子どもの育ちを一緒に考え、意見交換することができました。小学校の先生方も主体的で対話的な学びが非常に大切で必要なことだとおっしゃっていました。現状では、教育委員会との連携を考えておられないということですが、きっと学校でやるかやらないかは別として、教職員の方々と一緒に子どもの育ちを真剣に考えているのだという場所をつくっていけるのではないかと思います。引き続き私たちからもそういった働きかけは行いますし、この政策会議からも働きかけをしてもらえると、何らかの形で動くのではないかと思います。

あと、アンガーマネジメント事業については、行うのであればぜひ小学校で実施してもら

たいです。行政が主体となる形でよいので、小学校に場所を貸してもらって実施してほしいです。なぜなら、先ほどおっしゃっていたように、参加するかしないかは保護者の考え次第になるからです。子どもが自ら選ぶということにはならないと思うので、そういったチラシを配っても必要か必要でないかは大人が選ぶことになります。アンガーマネジメントするためには、相手が要りますから、相手もきちんとそれを理解していなければならないので、そういった学びの保障は全員にしてあげてほしいと思います。

○加我座長 ありがとうございます。続いて、ございますか。

○清水構成員 清水です。私は子育て経験がなく、今関わっているのは大学生ということで、小さな子どものことはあまり分かりませんし、北区の子育てに関する取組などもあまり詳しくない中ですが、感じたことをお話しさせていただきたいと思います。

まず、驚いたのが、事業案2のところですが、アンガーマネジメントを子どもたちが学ばなければならない状況になっているということに本当に驚きました。子どもというのは、本当に無邪気でやはり自分の感情を抑えるよりもどんどん出していき、それでいいことも悪いことも出すことによって様々なことが発散されたり、そこから相手の顔色を見て学んでいくと思っていたので、感情をコントロールして抑えたり、おとなしくなることを学ぶというのは、ある意味恐ろしいことになっているのだなと感じました。では、だからどうしたらいいのかということとは言えないのですが、何人かの方がおっしゃっていましたが、子どもよりもまずはやはり親や社会の大人が学ばないといけないという気がしています。子どもは親だけと接するわけではないと思うので、社会の大人もやはり何か子どもに対して冷たい目とかがあったりもするので、まずはそういった人たちが学んでというふうに感じました。あまり回答になっていないかもしれませんが、少しこのような状況に驚いたということです。

大学生だったらカウンセラーなどが大学にいるので、色々と個別に相談したりできるなど、昔よりは本当に細かくしているのかなと思いますけれども、では、子どもたちにはどうしていったらよいのかは、アイデアがなかなかないです。

それと、事業案1ですが、まず北区に小学校が何ヶ所あるか、子ども食堂がどれぐらいあるか、また、保育園と幼稚園との違いは分かるのですが、こども園とは何か、あまり分からないまま、意見を言わせていただきますけれども、まず皆さんがお話しされていたように、継続性とか、あと、規模の問題とか場所の問題とか、その辺のところはやはりこれから詰めていかないといけないのかなと思います。回数が3回というのはやはり継続性を考えたときに、ぷつりと切れてしまう、関係がつくられたあとに、そのまま終わってしまうことになり、もったいないのかなと思うので、全員が継続しなくてもいいと思うのですが、何かそこで引っかかった子どもだけでも引っ張っていきけるような、そのような仕組みがくれたらいいのかなと感じました。まず、みんなを大きなところに集めて引っ張っていくという方法もあれば、それぞれの場所で、小さいところから引っ張っていくという方法もあるので、これも

やはり双方に相乗効果があると思うので、両面から考えていくということも大事なのかなと思いました。小学校1年生ということなので、なかなか箱とか枠をつくって、さあ、行きましょうといっても難しいかもしれないので、勉強のようなものというよりは、昔でいったら例えばラジオ体操とか、あとは、夏休みでしたらプールとかで、毎日行かなくても、行ったら何かもらえるととか、スタンプを押してもらえるととか、少し友達と遊べるとか、何かそのような形であまり強制せずに、好きなときに参加できるような、そのような仕組みがあればいいと思いました。

○加我座長 ありがとうございます。私も本当に同じように感じていて、子どもが感情を抑制するということが本当に求められているのかと感じております。

○吉村構成員 私もそう思っています。感情表現は悪いことではないです。その表現の仕方とか、相手とのコミュニケーションの仕方という意味でのアンガーマネジメントでしたらよいと思います。ですから、保護者も一緒をお願いしたいと思っていますところでは。

○加我座長 ありがとうございます。辻さんどうぞ。

○辻特別構成員 少し私の立場からも意見を言わせていただきます。まず、事業案2について今、吉村様がおっしゃられたように、私もそう思います。また、今回の「子どもの生きる力を育む」ということの大きな根本にあり、大事にしていかなければならないことが、冒頭に自治会長の天野様がおっしゃったようなことだと思えます。私も子育て中は、ボランティアには一度も参加したことがありませんでした。余裕がなかったということもあるのですけれども、ボランティアを担ってくださる方々にはとても感謝しつつ、今違う形で子育てを援助したり応援したり役割を果たしていく場として、この2つの事業案を実施していけばよいのではないかと思います。まずはつながって、そして広がって、そして続けるという「北区の子どもたちの生きる力を育む」取組にしていけばよいと思います。同時に「親も地域も成長できる」視点も大事なのではないかと考えます。事業案2ですが、「アンガーマネジメント事業」という、タイトルが子どもに参加してもらおう活動としてどうなのだろうと思います。中身としては周りの友達とうまくつながったり、関わったりするための取組だと考えます。関わるのが大切だからこそ、自分自身の感情や気持ちを、どのようにうまく相手に伝えたり自分自身で収めたりするのかということも学んでいく取組かと思えます。吉村様からもあったと思いますが、子どもたちは保育所から小学校に行くとき「友達100人できるかな」と期待しながら行き、小学生になれば友達100人作り、関わりの中で、この子とはちょっと意見が違うとか、色々なことを経験していく時だと思えます。そういったことも考えながらこの取組を実施することで、親も成長できるというポイントも大事かと思えます。大学生になって、人間関係で退学してしまうという事例もありますので、人と関わるという経験は大切だと思います。ネーミングを「友達とうまくつながる」とかにしていただけたらありがたいかと思えます。学齢期の子どもに向けた事業案1については、私も「3か所で、全3

回」では、つながったり広がったりするには、不十分ではないかと思います。最初は数か所から始まった「子育てひろば」や「子ども食堂」もこのように継続して、今ではたくさん広がっています。そこから新たなつながりを作り、この事業案を継続していけばより広くつながっていく場になるのではないかと思います。今ある場を活用して、より広いつながりを作っていく事業案として、すごくいいと思います。全体で集まる機会についてもご意見があったかと思います。確か荀子の言葉だと思いますが「聞いたことは忘れる、見たことは覚えている、やったことは使える」さらに「やったことを伝えることでより深く学べる」もあったと思います。子どもたちが自分たちで考え体験したこと、例えば宝探しなどを今度は親を招待して実施するとか、保育園の子どもを招待するとか、そういう形で経験したことをまた誰かに返すことで、この活動もより意義のあるものになるのではないかと思います。

○加我座長 ありがとうございます。どうぞ。よろしくお願いします。

○金戸構成員 先ほどからお聞きしていて、子ども向けアンガーマネジメントは親子を対象とすべきとおっしゃってくださったのはその通りだと思います。子どもが感情をコントロールするのって本当に難しいと思いますし、元気のいい子どももおとなしい子どももいるけれど、吉村様がおっしゃったように、本当に表現していくことが大事なので、コントロールするのはもう少し大きくなってから協調するために必要なのかなと私も見させてもらっています。私には今、小学校1年生の子どもがいますけれど、とてもコントロールというよりは感情をどんどん表に出しています。しかも、感情を出してから気づくことなどもたくさんあって、後から謝ったりすることもなかなかできないことも多くて、ずっと不貞腐れていることもありますが、友達とだったら謝っているって言っていたりとか、そのように家の中で勉強したことを、外では活かしてきているなということを感じたりもするので、先ほど仕様がおっしゃったように「お友達と仲よくなるには」のような、もっと柔らかい感じの講座で、また、小学校1年生の子が1人で来るということは不可能だと思うので、学校で開催してもらうか、親子で参加するという形でよいと思います。そしてやはりハードルが高いと親御さんが感じると参加させないと思うので、アンガーマネジメントを小学校1年生が理解できるかと思った時に、最初から周りの皆さんが参加する形でしたら参加させるかもしれませんが、ご自由にどうぞ、申込みしてくださいと言われても、ピンとこないのではないかなと感じました。

事業案1については、回数が少ないというご意見もありましたが、私は内容としては宝探しであるとか、大泉緑地で冒険するとか、子どもたちは好奇心旺盛ですので、すごく楽しいと思うし、知っているお友達と一緒に遊ぶのも楽しいけれど、そこで新しいお友達ができたり、知らない大人とも関わったりして、これがすごくいいなと個人的に思いました。

ただ、協力していただく方々がどれだけの協力できるのか、何回も実施しようと思うとやはりどのように段取りしたらいいかということもあるので、まずは1回やってみて、次はどうしようという形にするのか、年間どれぐらい実施すると決めてするのかは私にはちょっと

想像つかないことなのですけれど、このような子どもが体も心も動く、そういう企画は素晴らしいなと思いました。

○加我座長 ありがとうございます。それでは竹内さん。

○竹内構成員 まず、事業案2の子ども向けアンガーマネジメントについては、先ほどから皆様がおっしゃっているように、抑制するというよりも、まずは小学校低学年ぐらいだと表現をしっかりとしてもらえそうな環境というか、そういったものがあってこそコントロールとか、アンガーマネジメントがより効果的になるのかなということを思いました。また、事業名称が子ども向けアンガーマネジメント事業となっているのも少し固い印象があって、それに行こうということになりにくいと思いますし、行政が実施しているとなれば、精神的な課題がある人が対象であるような印象を受け、ネガティブなイメージが大きく、子どもにとっても自分は対象ではないと感じられてしまうのは、どうなのかなと思いました。

今、ターゲットは小学校低学年の子どもとなっていますが、子ども向けという、子どもの幅、どの程度の子どもを想定しているのかということに対して、子どもには中学生も高校生も含まれると思います。中学生、高校生ぐらいの思春期になると、情緒のことなどもあり課題も多いです。子育てというと、乳幼児や小学生がメインと考えられがちだと思うのですが、今回は学齢期を想定して考えていますという前提だとは思うのですが、もう少し中学・高校生に対する生きる力に関する支援、社会に出ていくことが近い将来になっている年代に対しても何かできないのかなということを思いました。

そして、事業案1の生きる力を育むプログラム事業に対しては、協力者として大学生ボランティアも想定されているのですが、小学校1年生の子にとっては大学生も大人の部類で、そういう親以外の大人との関わりを作ることも大事だとは思うのですが、もう少しお兄さん、お姉さんと感じられるような年代の中学生、高校生ぐらいの方を、参加者というよりはボランティアとして、一緒に成長できるような形もいいのかと思いました。

あと、食育体験活動などで、お菓子づくりというご説明があったと思いますが、お菓子づくりなどよりも、もっと日々の生活に直結するような、小学校1年生でも朝ご飯を自分で作れるようになるといったこともいいと思います。小学生の朝食の欠食に関する問題や、それが学力に影響していることなども聞いたことがあるので、そのようなことを感じました。

あと、生きる力、体験活動の中で、何かそういう楽しい、遊ぶメインとか、公園で冒険を楽しむとかいうことでいいと思うのですが、例えばこども110番の家というものがありますが、その家にどのような人が住んでいるか分からないし、実際何かあったときに逃げ込めるのか、実際機能するのかと考えると、そういったこども110番の家に登録している家を巡ったりすることもよいのではないかなと思いました。

○加我座長 ありがとうございます。一通り皆様からご意見をいただきましたが、事業案1、事業案2ともに非常に楽しみではございますけれども、私、行政計画によくお付き合いをさ

せてもらっておりますので、少しきつい言い方になろうかと思いますが、行政の中で予算を取るときにはこの2つの事業名称でいいですし、こういった提示の仕方でもいいと思うのですが、実際に参加者を募集するとか、チラシを作るとなると、おそらくこのようにはならないでしょう。本日皆様からご意見いただいたのは、参加者の目線ということだと思えますので、十分に参考にしていただいて進めていただければと思います。その時に大事なことは、この子ども食堂で大学生が関わって一緒に食事をするとか、アンガーマネジメントの講演会をするといったことが目的にならないようにということだけは気をつけてください。これらは手段でしかありませんので、別にこのプログラムをやらなくてもよいわけですし、こういった講演会をやらなくてもいい、何が目的なのかというと、子どもたちが生きる力を育むことや、先ほど100人の友達ができるかなというお話がございましたけれども、子どもたちが友達とのコミュニケーションをうまくとれるようになるということが目的になろうかと思えます。ややもすると、このプログラムを実施することが目的になってしまうことがよくありますので、ぐっと立ち戻っていただいて、目的と手段を間違えないようにいただければと思います。

もう一つ、私はよく関わってきましたが、公園や道路で社会実験をしましょうと、社会実験をすることによって道路をうまく使っていくのです。今回、1車線止めました。公園で今までできなかった火遊びができるようになりました。それは社会実験です。社会実験はなぜするのかということていきましたと、それを実現するためにどういう手順を踏めばいいのか、何が課題になっているのかということを探るのが社会実験なのですけれども、巷でよくやっていますのは、社会実験をすることが目的になってしまっていて、実験したことを喜んでといったことがあります、本当はそうではない。それを実現するために何が課題になっているのかを探ることが大事だと思いますので、つなげて、続けて、広げていくっていうことを考えると、今回やってみて、何が課題になっていて、何を覚えていけばいいのかっていうことと、これらのプログラムを通じて地域で何が課題になっているのかと、担い手がなかなかいないとすれば、そういった方々にどうアプローチすれば広がっていくのかということの課題発掘のために実施するというのを忘れずに、取り組んでいただければと思います。

ただ、自身の子育てがうまくいっていたかということ、最近、子どもとあまりうまくいっていない関係にありますので、子どもは親の姿をよく見ているなと思います、私もずっと「忙しい、忙しい」と言っておりましたが、だから子どもも「俺も忙しいんや」というようなことを言うのだなど、これは私の背中を見ているからそうなっているのだということ、本日皆様からご意見いただきながら反省しました。

ところで最近、若い方々とお話していると、新型コロナウイルスの影響によって新たにリモートというツールを獲得したということがありますが、改めて、今日のように対面で会うことの重要性ということで、私たちが働くということとか、コミュニケーションをするとい

うことで、どちらがいいということではなく、ツールが多様になってきたと思うのです。

そういうことでいくと、リモートワークが増えてとか、地域でいろいろ過ごす時間も増えてきたかと思しますので、そうした局面をうまく、これは区役所の方々にということだけでなく、みんなで捉えて、新たな地域の関わり方だとか、新たな時間の使い方みたいなことができればと思います。

あと、もう一つは、私も公園に携わっていて、公園は子どもたちの遊びの場所で、子どもたちが過ごす場所で、それは体力増進のためであり、仲間づくりの場であり、それは学校も、小学校もと思うのですが、教育委員会と一番壁があるということがよく分かりまして、もう一つ、公園の中に遊具がありますが、我々、公園建設はするのですが、陸上競技場や体育館というのは教育委員会の所管なのですね。両方で同じ健康ということをおきながら、今まで仲が悪かったというか、あまり話すことがなかったということで、最近よく教育委員会の方々とお話する機会が少しずつ増えてきたのですが、その時に、何かをしてくださいと言うと、向こうも「そんなん忙しいからできへんわ」ということがあります。目的は何なのですかと、そうですよね、市民のための健康増進ですよということで行くと、お互いに、我々こんなことをやりたいと思っているのですが、少し情報発信だけしてもらえないでしょうかというようなことで持っていくと、目的から話しすると結構お話ができる機会もあろうかと思います。

それと、子育て支援課や企画総務課が、その課だけで完結させなければならない責任を背負う必要は全くないと思いますので、アイデア出しはそれぞれの課からだと思いますけれども、どちらに話を持って行って、どこの課に協力を求めれば実現するのだろうかというような対応をしていただいて、取り組んでいただければと思います。

それでは、次の案件に進み、もう一度皆様で意見交換できればと思います。資料5の説明を事務局からお願いいたします。

○事務局（阪本） それでは、孤立を防ぐ子育て世帯間や地域とのつながりについての想定事業案について説明させていただきます。資料5をご覧ください。

まず、事業名称ですが、地域SNSにおけるつながり醸成事業としました。新たなつながりを生むきっかけの場として、SNSを活用してはというご意見を多くの方からいただきました。また、子育て世帯は気軽なつながりを求めているといったご意見もありました。これらのご意見を受けまして、北区が地域情報発信ツールとしております地域SNSピアZZを活用する当事業を考えました。

それでは、この地域SNSピアZZで実施したい2つの内容をご説明いたします。まず、1つ目ですが、子育て支援施設を身近に感じてもらうという目的のため、子育て世帯が利用できる施設一覧をSNS上で発信することを考えております。また、SNSで紹介する子育て支援施設には、イベントなどのPRの場としてSNSを活用してもらい、支援側と支援を

受ける側のマッチングを図ります。

具体的には、子育てひろばや子育てサークル、子ども食堂、園庭開放などの情報をSNSのマップ上に展開し、親子のお出かけ先を気軽にスマホで地図から探しやすくすることにより、支援施設と子育て世帯のつながり、支援施設での子育て世帯間のつながりを促進します。また、SNSを支援者側の情報発信の場として活用していただき、支援情報が集まるSNSとすることで支援を受ける側がタイムリーに支援情報を得られるようなSNSを目指してまいります。さらに、子育て支援施設のSNSでのPR支援として、例えばですけれども、動画撮影を北区役所のほうで行うようなことも検討していきます。

次に、2つ目ですけれども、このSNSから気軽に子育てに関する相談が区役所にできるようにして、いざというときに助けてもらえる公的機関とつながっているという安心感を醸成します。具体的には、SNSから相談や質問ができるように、北区役所窓口への問合せフォームのリンクをSNS上に貼ります。また、子育て関連の相談先を整理してまとめた一覧により、相談できる先を明確に示し、困り事の内容に応じたいろいろな支援機関を知ってもらうことで安心感につながります。これは、相談や子育ての悩みなどが自由にできる場としてオンラインを活用すべきというご意見を受け、考えたものです。

次に、成果指標ですが、地域SNSピアッザ登録者数、SNSを通じた子育てに関する相談者数を基に効果検証していきたいと考えております。次に、スケジュールですが、令和5年度からの実施に向け、現在調整中です。PIAZZA株式会社と連携して早期の実現を目指してまいります。最後に、特記事項ですが、当事業はPIAZZA株式会社との連携協定に基づき実施いたしますので、予算をかけずに実施できるものとなります。以上です。

○加我座長 ありがとうございます。本件についてご意見等をお受けしたいのですが、いかがでしょうか。最初に私の方から、このピアッザの取組は非常にいいなと思いますし、SNSを通じてということになりますと、今の若い世代の方々にとっては、情報も入手しやすいですし、情報も送りやすいということで、十分これを活用していただければなと思いますが、先ほど、私も少しリモートワークのところでお話しましたが、あくまでもハイブリッドであるというのでしょうか、ツールが多様になったということの1つだと見ていただければと思います。これをきっかけに成果指標として登録者数、子育てに関するSNSを通じた相談件数を設定されておりますが、これをきっかけに窓口に来られる方が増えてくるということも重要な成果だと思いますので、場合によっては対面で相談をするほうが話しやすいということもあろうかと思っておりますので、相談窓口ということも重視していただいて、アナログのよさとデジタルのよさとを両方意識していただければと思います。

ほか、お気づきの点等ございませんでしょうか。どうぞ。

○北口特別構成員 子育てアドバイザーとして生後6か月の方を訪問させていただいている時に、さかい子育て応援アプリというものをご紹介させていただいていますが、それとのすみ

分けといますか、どのようにリンクしていくのかなということを教えていただければ、ママさんたちに伝えやすいと思っています。ピアッザはこのように使っていくとすぐ子育てしやすくなりますよというように伝えていきたいと思いますので、その辺りの情報をいただくと私たちも伝えやすいかなと思いました。お願いします。

○加我座長 事務局はどのようにお考えですか。

○事務局（増川企画係長） 企画総務課の増川と申します。さかい子育て応援アプリもピアッザも情報発信という意味ではどちらも同じなのですけれども、ピアッザの特徴としましては、地域コミュニティの活性化というところがございますので、まずはSNS上の地域コミュニティを作って、それをきっかけに各支援施設でのリアルな接点につなげていきたいというのがピアッザの取組になります。

○加我座長 おそらくすみ分けとしては、子育て応援アプリは情報発信、SNS上でコミュニケーションを取りたい人はピアッザでということかなと私は思います。これも先ほどお話ししたのと一緒で、SNSピアッザでつながることが目的になってはいけないということだと思います。子育てで困っている人たちが駆け込める、相談できるっていうことが大事だと思いますので、そこを間違えないようにということと、子育て応援アプリの方がまだ普及していないと言いますか、皆さんご存じでなければ、それをどう宣伝していくかであったりだとか、情報発信していくかであったりだとか、というふうなことも考えていただければと思います。

ややもすると、本当にピアッザが目的になってしまうのです。絶対にそうではなく、ピアッザはツールだということを忘れないでくださいということをお願いしておきたいと思います。はい、どうぞ。

○坊農構成員 子育て応援アプリについて今日初めて知ったのですが、今、先生がおっしゃったように、まず、北区のホームページか何かで、どういうときにはピアッザ、どういうときには子育て応援アプリということを明確に示して、きちんと誘導するようなものを北区のホームページで宣伝されてはどうかと思いました。ちなみに、子育て応援アプリっていうのはSNSではないのでしょうか。違うのですね、知らなくてすみません。

○北口特別構成員 子育て応援アプリは情報サイトのような感じで、子育てひろばはどこで開かれているかであったり、保育所の空き状況なども見られたり、イベント情報を見られたりもするので、スマイル訪問という訪問で家庭に行かせていただいたときに、ママさんにはこのアプリから色々な情報が見られるというお話をさせていただいています。

○坊農構成員 そういうことでしたら、やはり利用者の方には、どちらを使えばいいかわからないということにならないようにすべきと思います。

○北口特別構成員 そうですね。説明する側にも分かりやすくしていただけると大変ありがたいと思います。

○坊農構成員 早速、後で拝見させていただきます。ありがとうございました。

○加我座長 垂井区長、よろしくお願いします。

○垂井区長 子育て応援アプリは、堺市の子ども青少年局が運用しているアプリで、色々な子育てに役立つ情報を登録した方が見ることができるもので、様々な堺市の取組に関する情報が載っています。一方、ピアZZというアプリも子育て世帯に多く使っていただいています。自由に北区エリアや全国のユーザーと交流ができ、また、色々なグループ内の交流もできるという特徴がございます。先ほど座長もおっしゃっていましたが、チャンネルが色々あるということで、使い方はどちらも含めてうまく使っていただくと、それによって自分が悩んでいたことがうまく解決できるということがあれば一番ありがたいと思っています。ですので、どちらか一方を使うというよりは、どちらのアプリもうまく活用していただくということが大事ななと思っておりますので、よろしくお願いします。

○加我座長 よろしいでしょうか。どうぞ、清水さん。

○清水構成員 ありがとうございます。2つありますが、1つ目は、このピアZZというアプリは、チラシに堺市と書かれていますが、予算はゼロということなので、お金が動いているのではなく、人を出しているというわけでもなく、ただ連携だけしておられるのかなというところが知りたいです。2つ目は、成果指標のところにピアZZの登録者数ということが書かれているので、これをKPIの指標にしているということですね。ここをやっぴり重要視されているのか知りたいです。

それと、これは少し思うことなのですが、相談内容はおそらく本当に軽いものから重いものまで色々あると思うのですが、人によってはやはり相談しやすい人とそうでない人とあるのではないかと思います。そこで例えば、こういった相談事例が今までにあって、このような道筋で解決されました、であるとか、または、解決まで至らないけれどもこういったことを聞くことができ、こんなサポートができました、といった事例集のようなものがあると「あっ、こんな些細なことでも相談して大丈夫なんだ」という安心感のようなものが出て、もっと利用が増えるのかなと思いました。これはアイデアとして提案させていただきます。

○加我座長 ありがとうございます。事務局のほう、いかがでしょうか。

○事務局（増川企画係長） まず、ピアZZですが、ピアZZ株式会社が開発運営するアプリで、それを、区としましては情報発信ツールや、地域コミュニティの活性化に使わせていただいておりますので、予算はかからない形で運用しております。

○事務局（林企画総務課長） 企画総務課の林です。ご質問いただきありがとうございます。ただ今担当からも申し上げましたように、ピアZZは地域コミュニティの活性化というところで活用しているものですが、ピアZZのイメージを申し上げますと、北区エリアの開設をピアZZ株式会社の方でしていただきまして、その中で北区にお住まいの方であるとか、北区に興味のある方が登録していただくと、登録した人同士の投稿が見られるなど、そういった形で情報が共有できるものになっております。

そこで、1つはKPIの指標というところでもあるのですけれども、登録者数がどれだけいるかということは1つ大きな目安になるのかなと思っております。参考までに、令和4年10月時点で1,500人程度登録をいただいております、比較的順調に伸びてきているところではあるのですが、やはり登録していただく方が多くなると、それだけSNSが活性化して、「じゃあ、私も何か投稿してみようかな」というように思っただけだと考えておりますので、そこを増やしていく努力もやはり必要なのかなと思っております。

あと、窓口での相談のこともおっしゃっていただきましたけれども、加我座長からもやはり窓口につながるか、その辺の検証も必要というお話もあったかと思うのですが、どんな相談内容でもいいかというところは、相談窓口の入り方の案内とか、例えばこのような相談でもいいですよといった案内を併記するとか、なるべく相談してもらいやすいようなやり方を工夫できるのかなと思ったところと、あとは正直実際どれだけの相談をいただけるかというところも分かっておりませんので、それを受けて、どのような形で窓口につながるのかどうか、そういったところも併せて検証できればいいと思っております。以上です。

○加我座長 ありがとうございます。ほか、ございませんでしょうか。お願いします。

○天野構成員 少し補足をさせていただきたいのですが、集団登校という話が出ました。集団登校をしているところとしていないところがあります。なぜしていないかと分析しますと、全てこれは親御さんの問題なのです。子どもじゃないのです。子どもは集団登校したいのです。だから、親御さんがそのような気持ちにならないと前へ進みません。例えば私どもの校区でいきますと、集団登校をしていません。今まではしていたのです。途中でやめているのです。子どもに話を聞いてみると、「僕らやっぱり友達と一緒に学校へ行きたいんや」という言葉が返ってきます。だから、やはりこれは親がもう一度反省すべきだと思うのです。そういうふうに私は思っています。

それから、この集団登校は、ただ一緒になって学校へ行くだけではなくて、非常に大きな意義があると思うのです。なぜか、1つは、リーダーになる子ども、例えば6年生の子どもが下級生を連れていきます。この6年生の子どもが将来リーダーシップをとれるようなことが自然に身につくのです。社会人になった時にそういった新しい知識の子どもがたくさん出てきたら、社会はよくなると思うのです、と私は思っています。それがまず1点です。

それから、その後ろについてくる子ども、これはやはり組織があって、組織の中に自分も一緒になってやるのだと、こういった気持ちが生まれてきます。俺だけ、私だけではなく、社会は組織の中で動いているわけです。そのことを、身をもって体験できるということで、非常に私は有意義なものだと思っています。したがって、私どもでは今までこれの育成をするために「こどもまつり」を開催しました。今は新型コロナウイルスの影響で中止していますが、どんなことかと言いますと、全ていろんな事業をするときは、全部、我々大人が企画するのですが、この「こどもまつり」は子どもが企画するのです。実行も子どもです。大人

はサポートするだけ。したがって、そこにやはりリーダーが出てきます。そのリーダーについていく子どもができてきます。ということで、先ほど申し上げた集団登校に似た形のもので生まれてくるのです。残念ながら、直近で3年ほど開催できていませんので、また復活をしたいと思っていますけれども、そんなことがあって、やはりこれが1つの、大人が阻害をしている大きな要因ではないかというように私は思っているところなのです。ぜひとも皆さん方も機会があればそういったお話をしてあげてください。よろしく願いいたします。

○加我座長 ありがとうございます。多分、今日の事業案1、案2、案3を通じてだと思うのですが、地域の方々が何もやっていないのではなくて、実は地域の方々が色々なことを担ってくれている、そういうこともきちんと情報発信できる。それで、子どもたちは育っていくのですよということを改めて情報発信していただければと思います。

場合によっては、集団登校するのに大人の付添いが必要なんて考えていない人も多数いらっしゃるかと思います。誰かが働いてくれているのですということもきちんとお伝えいただければなと思います。昔は集団登校がなくてもガキ大将がいましたからね。兄ちゃんの背中についていって、そのときに上級生に、いじめられ、少し責められる時があれば、上のお兄ちゃん方は下の子らを面倒よく見てくれているというようなこともあったかと思いますが、そういった機会が少なくなっているということも現実だと思いますので、少し区役所のほうでもそういった課題を見つけていただければと思います。

ほか、よろしいでしょうか。はい、どうぞ。

○魚谷構成員 事業案3ですが、SNSを活用ということなのですが、ターゲットである北区内の未就学期の子育て所帯、特に周りに身内や知人がいない世帯は皆がSNSを十分に活用されているかどうかという心配もありますし、それ以外の方でも常にSNSを使っておられる方ばかりであれば、このピアッザの活用もいいと思うのですが、事業を開始する前に、ピアッザでこのような事業を実施すること、また、ピアッザを活用してくださいというPRを、古い世代で申し訳ないのですが、紙の媒体でも何らかの形で皆さんに周知することも必要ではないかと思っておる次第でございます。以上です。

○加我座長 ありがとうございます。先ほど区長からお話がありましたが、チャンネルが多様になっただけですので、このチャンネルだけということを決してないと思いますので、色々なチャンネルを活用していただければというふうに思います。

はい、よろしいでしょうか。それでは、ありがとうございます。本日構成員の皆様からご意見が様々でたと思いますが、それを十分に参考にしていただいて、様々なアイデアもいただいたかと思いますが、このようにすればいいのだというようなこともご意見いただいたかと思いますが、取り組んでいただければと思います。

これで本日の会議の議事のほうは全て終了しましたので、事務局のほうに進行をお返しいたします。よろしく願いします。

7 開会

○事務局（阪本） 構成員の皆様、本日はありがとうございました。いただいたご意見を参考にさせていただき、北区の子育て支援施策を前に進めてまいります。本日の会議で子育てをテーマとした会議は一旦終了とさせていただきます。このテーマにおける特別構成員である北口様、仕様は本日が最後の会議となります。ありがとうございました。

次回の北区政策会議は北区まちビジョンの基本方針1「みんなでつくる安全・安心の街に関するテーマで開催する予定です。日程は令和5年の2月頃を予定しております。それでは、本日の北区政策会議をこれにて終了させていただきます。本日はありがとうございました。